

## テーマ（教育）セッション

# 事業承継のケースライティング

栗本 博行（名古屋商科大学 学長）

小塩 陽亮（株式会社ライスアイランド代表取締役）

落合 康裕（静岡県立大学経営情報学部 教授）

本年の教育セッションでは、事業承継ケースの書き方について、登壇者によるケースメソッドの実践、並びにパネルディスカッションを行った。本学会編集委員会では、一昨年より査読論文に加え、「ケース」の募集を開始した。全国大会においても2年前より教育セッションで事業承継のケースメソッド教育のあり方を議論してきた。標記テーマは、このような背景から実施された。

ケースライティングは、ケースメソッド教育の品質を左右する重要なものである。本セッションの前半では、学会参加者との間で「ライスアイランド」のショートケースを活用したケースディスカッションを実施した。ファシリテーターの栗本博行よりケースクエスチョンが提示され、問題解決策となる三つの代替案の根拠について会場参加

者との間で闊達なディスカッションが展開された。事業承継のような複雑な経営現象を議論するためには、先代から後継者への承継プロセス（時間軸）を踏まえた多様な変数（環境、戦略、組織等）を考慮したライティングが必要である。前半のセッションの狙いは、会場参加者に質の高いケースディスカッションはケースライティングに依存していることを体感してもらうことであった。

セッションの後半では、ケース企業の当事者である小塩陽亮、ケースファシリテーターの栗本博行がパネリストとして参加し、落合康裕がモデレーターとしてパネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、ケースライティングにあたって、ケース読者の思考プロセス

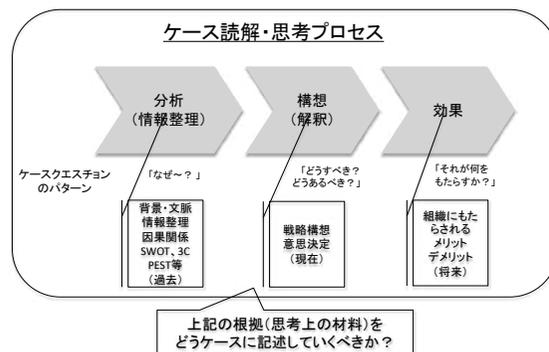


図1 読者の頭の中とケースライティング  
(出所) 筆者作成

の観点から、情報整理と分析、解釈と構想、意思決定と提言の三つの観点から考察を行った。第一の情報整理と分析では、読者が「なぜ、このような経営現象が生じるのか」等のケースクエスチョンを考察しうる背景や文脈のような手がかりをケースに記述する必要性が示された。第二の解釈と構想では、読者が分析結果に基づき、「どうすべきか」「どうあるべきか」を経営学の理論や概念を用いながら、自分なりの代替案（意思決定）の導出を促す記述の必要性が示された。第三の提言と将来効果では、読者の代替案が将来その組織にもたらす効果（利点や欠点）を推論しうる手がかりの記述の重要性が議論された。

経営学関連の学会において、ケースライティングそのものを取り上げたセッションはほとんど見かけない。しかし、事業承継が国策として議論される中、ケースメソッドによる事業承継ケースの作成はますます重要性を増している。本セッションでは時間の関係から議論することができなかったが、今後、事業承継ケース執筆にあたっての取材方法、依拠すべき資料、研究倫理面への配慮などに関する課題も議論されることが期待される。

#### （参考文献）

栗本博行・落合康裕・林 廣茂（2021）「MBAにおける事業承継教育の実践」『事業承継 Journal of business succession』事業承継学会編第10号，13-21頁。